

2-18-1 駿府城下の金森屋敷

① 駿府城下町の建設 (①は『静岡県史 通史編 三 (近世一)』静岡県発行 一九九六年 より)

「駿府城下町割絵図 (天保2年写)」(静岡市蔵) 矢印が金森長門守屋敷



慶長十二年（一六〇七）一月、徳川家康は駿府を菟裘^{ときゅう}の地と定め、駿府の城郭を広め、諸士の宅地を定めることを表明した。駿府の築城工事と城下町づくりが始まった。

駿府城の造営は同年七月完成したが、この年十二月の火災で焼失してしまう。しかし、慶長十三年二月には本丸の上棟式が行なわれ、八月には天守閣が完成した。

一方、城下町の町割は駿府城の拡張計画とともに立てられ、駿府城が完成する慶長十三年八月までに城下町の建設が進展したと考えられている。

駿府城下町の建設は城下町を安倍川の氾濫から防護し、駿府城を堅固にすることと不可分であった。安倍川を城下の西側に固定し、安倍川に駿府城の外堀の役割をもたせた。

こうして駿府城下町が建設されたが、江戸時代の城下町は武家とそれ以外の商人・職人との居住区が区分された。「駿府古絵図」によれば、武家屋敷は城内三の丸に重臣屋敷があり、大手門前から城を取り囲むように上級家臣の屋敷が構えられていた。また、城の南西方向、安倍川近くの一帯にも武家地があった。番町と称ると、城郭を含めた武家地が約四十五パーセント、町方が四十パーセント、寺社とその付属地が十五パーセント。

江戸の武家地が六十八パーセント余、寺社地・町人地がそれぞれ十五パーセント余（内藤昌『江戸と江戸城』）にくらべれば、かなり町方が広くとられていた。

「駿府城下町割絵図（天保2年写）」（静岡市蔵）拡大

